

【書評】

篠崎香織著『プラナカンの誕生—海峡植民地ペナンの華人と政治参加—』
(九州大学出版会、2017 年 9 月)

山本博之

マレーシアの際立った特徴は制度化された多民族性にある。とりわけ半島部マレーシアでは、マレー人、華人、インド人の三民族が存在して文化的に多様であるだけでなく、社会・文化から政治・経済に至るほとんどすべての領域で民族性が問われる制度と意識が存在する。かつては単一のナショナル・アイデンティティを重視する立場からマレーシアを国民統合の失敗事例とする見方もあったが、近年では、マレーシアの人々が多民族状況を受け入れ、個別の場面で多少の不満を抱いたとしても全体として大きな破綻を迎えることがない社会統合のあり方に積極的な意義を見出す研究も増えている。本書の著者もその立場からマレーシア研究に取り組む 1 人であり、本書は 19 世紀末から 20 世紀初頭の海峡植民地ペナンを対象に、華人を中心とする現地社会が自分たちをどのような場に位置付け、それぞれの場における政治参加をどのように進めてきたかについて、膨大な資料に基づいて実証した研究である。

インドネシア華人研究の貞好康志氏による本書の書評が『アジア研究』の第 64 巻第 4 号に掲載されており、本書の内容が丁寧に紹介されている。また、貞好氏は本書の意義として、先行研究を丁寧にレビューしたことにより問題の立て方が優れていることや、公文書や新聞・雑誌を中心に膨大な史料を渉猟したことにより細部の記述が優れていることを挙げており、評者もこれに同意見である。このことを断った上で、以下では貞好氏と異なる観点から本書の意義を検討してみたい。

* * *

本書の特徴は、ペナンの華人社会に関する情報を網羅的に収集し、細部まで記載している圧倒的な情報量にある。公文書と新聞・雑誌記事を組み合わせることで個々のエピソードが詳細かつ具体的に紹介されている。ただし、情報量の多さゆえに読者に戸惑いを与えることにもなりかねない。各章のはじめと終わりに章ごとの議論の要約が記されているが、本文では個々の記述についての解説が控えめであり、著者の問題意識を十分に共有していない読者は情報の森の中で迷うかもしれない。

本書全体を貫くテーマは書名の通り「プラナカンの誕生」であるはずだが、これは本書の議論の案内役として有効に機能していると言え難い。貞好氏の書評は敢えてこの点に触れていないが、『マレーシア研究』で紹介する上ではこの点に触れないわけにはいかない

だろう。

「プラナカンの誕生」の意味は、「はじめに」で簡単に触れられている。プラナカンとは、東南アジア華人研究では原住民と混血した華人を指す語として使われてきたが、本書では、歴史的に存在したプラナカンではなく、マレー世界において外部の血統を持ち現地で生まれ、ときに応じてマレー人に内包されたり排除されたりした者の意味でプラナカンの語を使い、「プラナカンの生き方」を選択した人たちに目を向けるとする。ただし、その例として挙げられたジャウィ・プラナカンが歴史的に存在したプラナカンであることが議論を込み入ったものになっている。

これだけの説明ではわかりにくい、先を読み進めても、序章では、本書では使わないとされた混血した華人という意味でのプラナカンが何度か言及されているだけで、「はじめに」より詳しい説明はない。第1章ではペナンの多民族社会を構成する人々の1つとしてジャウィ・プラナカンを再び取り上げ、「はじめに」よりも詳しく紹介しているが、「プラナカンの生き方」に関する説明はない。

これ以降は、脚注に何度かプラナカンの語が見えるが、いずれも本書では使わないとされた意味でのプラナカンである。本文で次にプラナカンの語が登場するのは終章で、プラナカンとは何かという疑問は解消されず、「プラナカンの生き方」については議論がないまま結論だけ示され、読者は戸惑うことになる。

* * *

プラナカンを脇において本書を読むならば、著者の関心がマレーシア社会における秩序構築の積極的な側面にあることは容易に見て取れる。著者が「民族の政治」と呼んでいるものもその一部である。マレーシアの「民族の政治」において肝心なことは、(半島部)マレーシアの住民が制度の上でも意識の上でもマレー人、華人、インド人の三民族に分かれており、社会・文化から政治・経済に至るまで民族性が意識されていることだけでなく、不満がある場合に暴力の行使ではなく言葉のやり取りによって解決を図ろうとするという考え方や態度が国民全体に共有されていることである。別の言い方をすれば、マレーシアでは、社会的に弱い立場に置かれた人たちが公正を求めて声を上げることは断固として支持するが、その人たちが過去にいかなる不当な扱いを受けていようとも暴力的な手段に訴えることは決して認めないという考え方や態度が広く共有されている。

このような「民族の政治」がマレーシアでどのようにして形成されたのかについて、これまで数々の研究がなされてきたが、十分に説得的な結論は得られていない。本書の執筆にあたって著者がこの問いを念頭に置いていたことは想像に難くない。このことに留意して本書を読み直すと、第I部では、ペナンの華人労働者が雇用者とのトラブルを解消するため、1877年設立の華人保護署や植民地政府を利用するようになったこと(第2章)とともに、イギリス国籍を持つペナン華人がイギリス領の外ではイギリス国籍者として認められずに不当な扱いを受け、被った不利益を解消しようとして言葉による交渉を重ねた様

子が描かれている（第3章）。

第Ⅱ部では、ペナン華人が現地社会の秩序構築に積極的に関与しようとした歩みが描かれている。東南アジアの華人商業会議所は清朝政府による華人動員のために設立されたとする通説に対し、ペナンでは華人商業会議所の設立に先立つ1881年に華人公会堂が設立されており、その背景には、イギリスによる植民地支配が進むことで華人社会に生じた亀裂を修復し、華人社会の発言力を高めようとする現地社会の要請があった（第4章）。1903年のペナン華人商業会議所の設立には、海峡植民地の公権力による干渉を回避して経済の自律性を確保し、海峡植民地の意思決定に参画するという背景があった（第5章）。さらに、海峡植民地における中心的な存在であるシンガポールに対してペナンの権利を主張するために1906年に多民族的なペナン協会を設立し（第6章）、1910年にはペナン在住のヨーロッパ人やムスリムからも支持を得た納税者協会を設立し、政治参加の枠組みをペナン華人からペナンへと広げようとした。ただし、同年に行われた市政委員会選挙では納税者協会が推薦した候補者が落選したことにより、全ての住民に開かれた選挙ではなく、華人組織を通じた推薦によって住民の代表を選出することの意義が再認識された（第7章）。

第Ⅲ部では、中国の秩序再編への関与を通じて自らの華人性およびペナンという場が意識されていく様子が描かれている。シンガポールの華人商業会議所の開設の背景には、清朝による華人の動員のためではなく、中国に帰国した海峡植民地の華人を保護するという現地社会の要請があり、ペナンもこれに倣って華人商業会議所を開設した（第8章）。1911年の辛亥革命にペナン華人が多額の資金援助を行ったのは、中国の革命に貢献するというよりも革命で混乱した社会の救済のためであり、無償で生命や財産を差し出したのではなく、自らの支援が適切に使われるように働きかけ、それを通じて秩序構築に間接的に関与した（第10章）。1912年の中華民国成立後にペナン華人が中国の新政権と関係を再構築したのは、「強い中国」に後ろ盾を求めたためではなく、中国での安全確保を求めて中国の公権力との関係を維持するためだった（第11章）。このように、中国側の動きの客体としてペナン華人を説明する通説をことごとく否定して、ペナン華人の主体性という観点から一つ一つ論じ直し、ペナン華人が中国との関係を認識することで自らの華人性を意識していったことを浮き上がらせている。これらの議論は、辮髪を切ることでかえって華人性が強まるとする議論と重なるかのようでもある。多民族社会のペナンでは他民族に対して華人性を示すことが重要であり、ペナン華人は一斉に辮髪を切って自分たちのまとまりを示すことで華人性の強化をはかった（第9章）。

本書に記されているのは、問題が生じたときに法に従って言葉による交渉を積み重ね、その過程でペナンという場に意味を見出し、ただし他民族との関係において華人性を自覚していくペナン華人の挑戦と挫折の積み重ねの足跡である。その意味で、本書はペナンに注目してマレーシアの「民族の政治」の起源と背景を論じている。2017年に刊行された本書は2018年5月に起きたマレーシア史上初の政権交代に触れていないが、政権交代の

後にマレーシア華人が新政権とどのような関係を結ぼうとし、どのような距離を置こうとしたかを理解する上で、本書の議論は多くの示唆を与えてくれる。本書のはじめと終わりだけ読んで、プラナカンに関する記述に引っかかりを感じて本論を読み進めるのをためらうとしたら、その読者は大きな知的損失を覚悟すべきである。

* * *

改めて、なぜ著者は本書の書名を『プラナカンの誕生』にしたのか。本書が参照しているプラナカンについての研究を踏まえ、さらに評者なりの想像を逞しくするならば、著者は中華世界におけるプラナカンの存在としてのペナンの誕生を意識していたのかもしれない。プラナカンとは、マレー世界において、多数派であるマレー人社会の周縁部にあって外来性と現地性を備えている存在である。中華世界において、中国の周縁部にあって中国にとって外来性と現地性を備えているペナンをプラナカンの存在と見た場合、このアナロジーは東アジアの理解にどのような示唆を与えるだろうか。

書名に関してもう1点、本書の副題は「海峡植民地ペナンの華人と政治参加」である。本を書店に並べてもらうためにはどの国の話か一目でわかる書名が望ましいという考え方に従えば、本書の副題は「マレーシア・ペナン州の華人と政治参加」とすることもできたはずである。「海峡植民地ペナンの華人と政治参加」という副題には、現在の国民国家の枠にとらわれた議論に収斂させたくないという著者の意図が感じられる。

海峡植民地では政治・経済面で中心的存在であるシンガポールに対してペナンは周縁部として扱われたため、ペナンは常にシンガポールを意識せざるを得なかった。そのため、ペナンを論じるにはシンガポールについての議論を踏まえる必要がある。ペナンを主な対象とする本書がシンガポールに関する記述にもかなりの部分を割いているのはそのためであり、したがって本書はペナン論であると同時にシンガポール論でもある。主に英語資料に依拠した研究が多いシンガポール研究にあって、華語資料を駆使した本書はシンガポール研究に対する貢献も大きい。本書はマレーシアに留まらず、海峡植民地（今日の言い方ではマラッカ海域世界のようになるだろうか）について考える上でも必ず参照されるべき研究である。

(やまもと・ひろゆき 京都大学)